

高等学校英語科の先生・教育委員会関係者対象

生徒に最適な英語試験 について考える

京都大学 国際高等教育院 准教授
【TOEFL ITP® 公式問題集 著者】

一般社団法人国際教育英語試験協会 アドバイザー 金丸 敏幸

1. CEFRのレベルと試験の目的 p.1
2. TOEFL Junior®とTOEFL ITP®の違い p.2
3. 英語運用能力を適切に測る試験選択 p.4
4. 海外留学やアメリカ大学進学の見点 p.5
5. 英語運用能力の考え方から見た
TOEFL iBT®とIELTSの違い p.6
6. 統合型テストと独立型テストの違い p.7

1. CEFRのレベルと試験の目的

TOEFL Junior®とTOEFL ITP®は同じTOEFL®試験であるため、たとえば英検(日本実用英語技能検定)の3級から準2級、2級のように連続して難易度が上がっていくような印象を持つかもしれません。しかし、TOEFL Junior®とTOEFL ITP®では、想定する受験者の背景が異なるという前提で作成されています。このことを理解するには、英語能力について用いられるCEFR(ヨーロッパ言語共通参照枠)について知っておく必要があります。

CEFRとは、ヨーロッパ評議会が策定した言語運用能力の指標です。AレベルからCレベルまで、実際のコミュニケーションの中で「できる」ことが期待される言語活動がレベルごとに記述されています。A1レベルからA2レベルへとレベルが上がれば、言語活動の幅が拡大することになります。しかしながら、「どの話題について言語活動を行うか」や「どの領域で言語活動を行うのか」といった事項は、レベルとは別に規定されています。

もう少し具体的に見てみましょう。CEFRでは、それぞれのレベルごとに、「書く」、「話す(やりとり・発表)」、「読む」、「聞く」という5つの技能でできることや扱うことのできる内容が記述されています。A1レベルは、自分自身と自分の身の回りに関する話題であれば情報を伝えたり、理解したりできると記述されています。B1レベルは、自分自身や日常生活に加えて、学校や職場といった普段の生活での社会的コ

ミュニティにおいて行われる言語活動ができるレベルだと設定されています。

ここで注意が必要なのは、同じB1レベルであっても、社会的コミュニティが異なれば、そこで使われる語彙や表現は異なるものになるという点です。成人が職場で使う語彙は、大学生や中高生のような学校で使う語彙とは異なります。同じ学校という活動領域での言語活動であっても、大学生と中高生では学習する内容やレベルは異なります。また、授業の受け方や学校での手続きなども違います。したがって、大学生と中高生が同じB1レベルであるとしても、使用する語彙や表現まで同じとは限りません。受験する試験を選ぶ際には、このような背景に注意することが大切です。

さらに、英語運用能力を測定する試験には、その試験が測定する英語の目的にも注意が必要です。英語運用能力を測る試験には、ビジネス英語やアカデミック英語といった、特定の目的に特化した試験が存在します。たとえば、TOEIC®はビジネス環境、TOEFL®やIELTSはアカデミック環境、英検は広く日常生活での英語が対象となります。活動領域や目的が異なれば、そこで使用される表現や語彙も自ずと異なると考えられます。したがって、試験を選択する際には、英語のレベルだけでなく、試験が対象とする言語環境や英語の目的を意識すると良いでしょう。

2. TOEFL Junior®とTOEFL ITP®の違い

TOEFL Junior®とTOEFL ITP®のどちらを受験するか考える際に、もっとも考慮すべきことは試験の対象となる言語環境です。TOEFL ITP®は、大学という高等教育機関における言語運用能力を測定することを第一の目的としています。それに対し、TOEFL Junior®は中高生を対象としていて、中等教育機関での言語運用能力を測定することを目的としています。両者の試験で、同じB1レベルに相当すると判定されても、実際には測定の対象となる言語環境が大きく異なることに留意が必要です。

このような言語環境の違いは、その環境で使用される背景知識が異なることと関係します。言語活動を行う上で必要となる、その領域に固有の知識のことを「ドメイン知識」と呼びます。TOEFL ITP®やTOEFL iBT®では、大学という環境に関するドメイン知識が要求されます。ドメイン知識についての具体例を挙げると、たとえばコンピューターを理解する際には、メモリーやCPU、プログラムといった用語と知識がなければ理解は困難です。また、「立ち上げる」という動詞でも、コンピューターの分野ではパソコンの起動を意味しますが、他の仕事の領域では組織の稼働を意味することがあります。このように、同一の語でも使用される分野によって意味が変わってきます。このような特定の領域に関わる知識がドメイン知識です。

具体的に問題で見てください(※次ページを参照ください)。たとえば、TOEFL

Junior®では、校長先生が放課後の予定について話したり、先生が留学生のお知らせをする場面が出題されます。小学校や中学・高校では、朝礼で先生が生徒に向かって挨拶をすることはよく行われています。そのため、受験する生徒にとっても、この場面は容易に想像できるものです。

一方で、TOEFL ITP®のリスニングでは、期末レポート(term paper)の書き方についての話題や、転学の際に単位(credit)をどうするのかといった話題が取り上げられます。これらを理解するには、大学では必要なコース(授業)を選択し、学期末には試験やレポートによって単位が認定される、といった学習制度を知っていなければなりません。いくら英語の単語や文法が分かっても会話の前提の知識を持っていないと、これらのやり取りを理解することは難しいでしょう。それぞれの発話が、どのような場面で行われるのかを知らなければ、発話の目的や理由を考えることは困難だからです。

※TOEFL Junior®とTOEFL ITP®のリスニング用文章の違い

TOEFL Junior®

(Narrator): Listen to the principal making an announcement.

(Man): Attention, students. Please be reminded that there will be a staff meeting after school today. Because all teachers are required to attend, there will be no after-school activities and all students must leave the school building immediately after their last lesson. The only students who many stay in the building are the students in the Mathematics Club. They will be attending a competition later this afternoon. Thank you all for your cooperation.

(Narrator): Listen to a teacher talking to a class.

(Man): As you have already heard, we will have twenty exchange students visiting our school for one month starting tomorrow. They'll want to learn about our daily life and school culture. When you meet the students for the first time, you should remember that they many ask some surprising questions, or they may do things differently than you expect. You should always be polite and helpful to our guests. Of course you can talk to them about life in their countries, too. The idea is to learn from one another!

(出典：『TOEFL Junior® テスト公式問題集 [改訂版]』)

TOEFL ITP®

N: Listen to a conversation between a college student and his counselor.

W: Good morning, Steve. What can I do for you?

M: Well, I've decided I want to transfer to a smaller college.

(略)

W: I might, but first I think I ought to warn you about some of the potential problems with transferring. The main one is how many of your credits will be accepted by your new college.

M: You mean they won't all be transferable?

(略)

W: First check with the admissions officer, then follow up with the registrar's office. ... (略)

N: Listen to a message on an answering machine.

(略)

M: Hi, Dr. Turner. This is Richard Hudson. I just picked up your comments on the rough draft of my term paper – thanks a lot. ...

(略)

(出典：『TOEFL ITP®テスト公式テスト問題&学習ガイド』)

3. 英語運用能力を適切に測る試験選択

これまで述べてきたように、英語運用能力を測定するのであれば、学習者にとってもっとも身近な環境での運用能力を測定する試験を選択すべきです。したがって、高校での英語運用能力を測定するのであれば、TOEFL Junior®が一番の候補になります。TOEFL Junior®で測定できる上限に近い能力を持っていても、高校と大学では活動領域が異なるため、何も準備をせずに、TOEFL ITP®を受験することはあまりお勧めできません。授業の受け方を一つ取っても、高校までの授業と大学での授業の受け方は全く異なるように、前提となる知識が同じではないからです。

たとえば、大学での授業の流れを理解していない場合、授業で講師が用いる言い方が分からない可能性があります。高校生が大学の授業を聞いても、なぜそのような授業が行われているのかがわからず、そこで用いられる表現の理由も、具体的な経験を経ない場合には、理解することが難しいかもしれません。ほかに、たとえばTOEFL ITP®のリスニングには、寮生活や単位取得の手続きに関する会話が出てきます。これらも、おそらく高校生にはあまり馴染みのない話題だと思われます。

もちろん、単語や会話の目的が分かれば、一定の英語運用能力をもとに理解することは可能です。しかし、相当の英語運用能力を持った高校生であっても、大学の寮に関する話を初めて聞いて理解したり、場面を想像したりすることは難しいでしょう。

言葉としては分わかっていても、なぜそのような発話が行われるのかといったことを理解するには、その背景の理解が必要で、そのような知識がないと、実感を持った理解をすることはできません。そのため、高校生がTOEFL ITP®を受験するには、純粋な英語運用能力だけでなく、大学という環境に関する様々な背景知識や理解を深めるための学習が必要です。

TOEFL ITP®の問題文の中には、生物の分類に関するものやアメリカの法律に関するものが取り上げられることがあります。たとえば、生物の種に関する概念が理解できなければ、関連する単語を知っていたとしても、その内容を理解することは困難でしょう。中学生や高校生にとって、「通商条約」などの言葉の意味は、たとえ母語の日本語であっても理解するのは容易ではないでしょう。もし、TOEFL ITP®の問題が日本語で書かれていたとすれば、受験者はCレベル(母語話者相当)になるはずですが、大学の講義を理解できるかといえば、必ずしもそうではありません。TOEFL ITP®を受験する場合は、日本語での大学レベルの知識が十分に備わっていなければ、正確に英語運用能力を測ることは困難であることが想像できますでしょうか。

4. 海外留学やアメリカ大学進学の見点

最近では、中学校の中でも、とくにイマージョンコースなどの英語運用能力の高い生徒が多い学校において、TOEFL Junior®かTOEFL ITP®のどちらにするかで受験する試験を悩まれることがあると聞きます。しかし、仮に英語がCEFR B2レベルであったとしても、中学生の持つ背景知識や経験から考えると、世界の中高生向けに設計されたTOEFL Junior®を受験して英語運用能力を測ることが適切だと考えます。現在のTOEFL Junior®は4技能を測定する試験になっています。

TOEFL Junior® STANDARDでは、リスニング、リーディング、文法・語彙を測定しますが、この試験で一定以上の運用能力を持っていると判断される生徒に対しては、スピーキングとライティングの試験(SW試験)の受験を考慮してはいかがでしょうか。これによって、発信力についても同等の運用能力を持っているかどうかを確認することができます。英語による発信力をB2レベルまで高めることができれば、バランスの取れた運用能力であると言えます。TOEFL Junior® STANDARDでスコアの良かった生徒には、まずはTOEFL ITP®よりも、TOEFL Junior®のSW試験の受験を推奨します。

また、もし、高校生に大学のことを先取りして学ばせたいのであれば、受験する前に、TOEFL ITP®のサンプル問題を学習することをお勧めします。これによって、大学ではどのようなやり取りが行われ、講義で

はどのような内容が扱われるのかということをご指導することが出来ます。このような指導を行う余裕がある場合は、TOEFL ITP®の受験を検討するのも一案です。

ただし、このようなことは大学に入学すれば自ずと分かることです。無理をして先取りするのであれば、まずはTOEFL Junior®において、B2レベルの実力が身に付くような学習を積み重ねることが良いかもしれません。留学を念頭に置いたとしても、TOEFL ITP®はリーディング、リスニング、文法・語彙の測定にとどまっており、発信力は測れないため、留学の準備としては不十分です。そうであれば、TOEFL Junior®のスピーキングとライティングに挑戦し、その力を伸ばす方が効果的でしょう。

大学から海外、とくにアメリカを目指す場合は、日本の入試とアメリカの入試の違いに注意を払う必要があるでしょう。日本の入試は高校までの学習の習熟度や能力を基に判断しますが、アメリカの大学は入学後の学習能力を重視します。言い換えると、海外の大学を目指す高校生は、大学に入学した後に、自分の力で学び続け自らの力を伸ばしていることを示す必要があります。そのためにも、TOEFL Junior®で、インプットとアウトプットを結びつける統合的な英語運用能力を測定し、その実力を高めておくといいでしょう。

5. 英語運用能力の考え方から見たTOEFL iBT®とIELTSの違い

話はやや逸れますが、海外の大学への留学を視野に入れ、TOEFL Junior®でB2レベルに到達した生徒が、IELTS やTOEFL iBT®にチャレンジした際、IELTSよりもTOEFL iBT®の方で苦戦するという話を伺うことがあります。TOEFL iBT®もIELTSも、同じように大学レベルのアカデミックな英語運用能力を測定する試験であるにもかかわらず、なぜIELTSの方が、同一機関が作成するTOEFL iBT®よりも、TOEFL Junior®でのCEFRレベルと相関性が高いのかという疑問が寄せられます。

IELTSの問題はケンブリッジ大学(ケンブリッジ英語検定機構)が開発に関わっていて、イギリスを中心に活用されています。英語運用能力に対する考え方について、アメリカと比較して、イギリスでは汎用的な能力やコミュニケーション能力の方により重点が置かれています。そのため、教科書の文章の読解などよりも、いわゆるアカデミックスキルズのような能力の測定が中心であると言えるでしょう。たとえば、図表等を読み、そこで何が述べられているかを読み

取る力や理解する力が対象となります。したがって、専門的な文章を読み解く能力よりも、汎用的な文章を英語で読み取る力や、図表等を含めて理解する力が重要視されているようです。そのため、たとえば高校生がIELTSを受験した場合、TOEFL iBT®に比べると専門的な知識を理解する必要性が相対的に低く、その点でTOEFL Junior®と内容の質的な違いが小さいと言えるかもしれません。

一方、TOEFL iBT®の場合は、明らかに大学における授業の理解を重視したものとなっています。たとえば、リーディングやリスニングは、大学で講義を理解し、専門的な知識を得ることできるかどうか問われています。また、ライティングでも講義を聞いた上で、その内容を自分なりの言葉で表現する力が問われています。授業の在り方や専門的知識を理解する方法という点において、TOEFL iBT®の試験内容は、高校までのものとは大きく乖離しているため、高校生ではスコアが伸び悩むのではないかと考えられます。

6. 統合型テストと独立型テストの違い

最後に、TOEFL Primary®やTOEFL Junior®のスピーキングとライティングの試験(SW試験)について説明します。TOEFL Primary®、TOEFL Junior®のSW試験は、ただ話したり、書いたりするのではなく、読

んで、聞いたものを整理して、「話す」、「書く」という形を取っています。これは統合型テストと呼ばれています。一方で、「読む」、「聞く」というインプットの部分をできるだけ切り離して、アウトプット

の部分だけを測定するのが、独立したテストになります。たとえば、TOEFL iBT®のスピーキングで、「あなたの印象に残っている場所はどこですか」という設問に答える問題です。このような問題であれば、インプットの能力に左右されず、話すことに集中できます。評価する方も、インプットの能力ではなく、「文章を組み立てる力」や「英語の流暢さ」、「正確さ」だけを測ることができます。

しかし、それまでの言葉を使う上では、話すことにしても書くことに単独でも、知識やその場で得た情報と切り離して行われることはあまりありません。統合型テストは、「インプットの理解」から始め、それを整理する能力も含め、どのようにアウトプットするのかまでを測定します。言い換えると、より現実に即したやり取りやコミュニケーションの能力をそのまま測ろうとしているのが統合型テストだということになります。

もちろん、インプットを理解することが重要ですので、あらかじめ持っている知識で差が付かないようにしなければなりません。そのため、たとえばリーディングによるインプットでは、特定の国に関するもの

を取り上げる場合はアメリカのものが対象となります。TOEFL iBT® はアメリカ以外の方が受験することを想定していますので、特定の国の話題を取り上げると、そのことを知っている受験生に有利に働いてしまいます。たとえば、日本の歴史を題材にすると、日本の受験生は日本のことを知っていますので、インプットを理解する時に有利になります。そういったことが起こらないよう配慮されています。

現在の試験は、統合型テストの出題が増えています。TOEFL iBT®のライティングは、これまで独立型と統合型の2種類が出題されていましたが、2023年の改訂で独立型のライティング試験は廃止されました。新しい試験では、ライティングは統合型テストのみになっています。また、新指導要領を念頭に置いた大学入学共通テストでも統合型の問題が見られます。新しい指導要領では、英語を使ったやり取りや理解・表現に重点を置く内容に変わっていますので、大学入学共通テストはそれを先取りしたものになってきています。今後の大学受験を見据える上でも、統合型テストへの対応を図ることが大切かもしれません。

著者紹介

金丸 敏幸

所属: 京都大学 国際高等教育院 准教授
経歴: 2016年 - 新英語カリキュラム
2015年 - GORILLA 開発
2009年 - 京大・学術語彙データベース
基本英単語 1110 出版
2003年~2008年 - 情報通信研究機構(NICT)
(NLP領域 日本人 147位)

著作: TOEFL ITP® 公式問題集

TOEFL Primary® / TOEFL Junior®
についての最新レポート

